第２５回

高校生による国際交流体験感想文コンテスト

優　秀　作　品　集

特賞（山口県知事賞）
私の国際平和への第一歩

山口県立岩国高等学校2年　**氏木　結**（うじき　ゆい）

今年の二月に、父のチリ人の友達の一家五人が日本に遊びに来ました。私の両親は約二十年前に青年海外協力隊で活動しており、そこでチリ人の人たちとの交流がありました。

私は最初、父のチリ人の友達が家に泊まると聞いて、楽しみよりも嫌な気持ちの方が大きかったです。なぜなら、チリはスペイン語圏だから意思疎通ができないと思ったし、南米での挨拶はハグと頬にキスをするので、日本人の私は抵抗を感じていたからです。

チリ人の人たちが来て、まず宮島に行きました。そこで印象に残っている出来事は、父親のベルナルドが他の日本人観光客のベビーカーを船から下ろしてあげていたことです。困っている人を見つけたらすぐに手助けしようとする気持ちは、人種や文化、国の違いは関係なく、その人が持っている思いやりの心なのだと思いました。

また、私が驚いたことは六歳のエステファンと十二歳の私の弟がすぐに仲良くなっていたことです。弟もエステファンも言葉が話せない同士ですが、ずっと一緒に遊んでいました。私はベルナルドたちが来る前は言語の心配ばかりしていたけど、仲良くなりたいという気持ちがあれば言語の壁もどうにかなるものだと感じました。

私は最初、日本語をスペイン語に訳すアプリを使って意志疎通をしていましたが、だんだん仲良くなるにつれてアプリは使わず、簡単な英語や身振り手振りで意志疎通をしようとするようになっていました。特に一緒に書道や巻き寿司を作った時は、お手本として私が先にやって見せたり、ワン、ツー、スリーのリズムで説明したりすることで、言語の壁を乗り越えられました。このような経験から、意思疎通をするためには完璧に言語を話せる能力よりも、相手と仲良くしたい、理解したいという気持ちの方が大事なのかもしれないと思いました。

それから、文化や国による価値観の違いがあることを実感しました。中でも、チリの国の人は立派な家や高い車ではなく、家族の思い出になる旅行など、今を楽しんで生きることを優先しています。ベルナルドは古い家を自分で直したり、同じ車に二十年以上乗ったりしているなど、チリでの生活のことを教えてくれました。私たち日本人は今の生活をより便利にしようと考えがちですが、チリの人たちは何気ない日常の中に楽しいことを見つけることが得意だと感じました。

しかし、ある程度言語が話せることは大事だと思った出来事があります。エステファンが私にスペイン語で話しかけてきましたが、全く分からないので「シー（英語のイエスと同じ意味）」と答えていました。しかしそのせいで、エステファンはふてくされてしまいました。エステファンの母親であるアンドレアは英語が話せるので、私はカタコトの英語で何とか話すことができました。英語は多くの国で使われている言語なので、英語が話せることで自分の世界が大きく広がります。今までは、「自分は日本で暮らすつもりだから英語は入試で得点が取れればいいだろう」と思っていました。しかし、この経験からもっと多くの文化、国の人たちと関わってみたいと感じ、まずは英語を話すことを意識した勉強から始めようと思うようになりました。

ベルナルドたちが来る前は外国人と三日間も一緒にいるのは想像がつかなくて嫌でした。しかし、言葉や考え方、価値観は違うけれど温かい人たちと過ごしたことで、自分の考え方や視野を広げる楽しい経験になりました。

現在では、在日外国人や外国人観光客が増え、日本国内でも外国人と関わる機会が増えてきました。しかしある国で、移民として入ってきた人々が集まって母国の文化で生活することで、その地域との風習の違いで両者が対立しているというニュースを見ました。私は今回の経験から、その問題は、両者が相手の考えや文化を理解しようとせず、自分たちの文化だけに価値があると考えることも原因の一つだと感じました。自分たちと違う相手の文化を理解することは言語の壁を乗り越えるより大変なことかもしれません。しかしその文化の壁を乗り越えることが、外国人と理解し合える第一歩なのでしょう。この人はアメリカ人だから、この人はイスラム教徒だから、など、自分と違う国籍や文化、宗教の人と関わる前から自分の中の固定観念でその人をみてしまうことは、自分にとって、とてももったいないことだと思います。

今回の経験を通して、楽しい思い出と共に、国際平和へのヒントも見つけることができました。私は相手を理解できたことで、嫌だった南米の挨拶も最後は温かさを感じました。グローバル化が進み、私たちの住んでいる世界は狭くなりました。だからこそ、国籍、文化、宗教などを考慮し目の前の人を理解しようとする人が増えることで、もっと住みやすい世界を創っていくことができるでしょう。

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）
本当の「国際理解」とは？

高水高等学校1年 **豊田　ゆき乃**（とよた　ゆきの）

去年の九月、我が家にオーストラリアの高校生カーラが一週間のホームステイにやってきた。外国の人が我が家に来るのは初めてでベッドルームの用意、食事や休日の計画など日本の生活を堪能してもらおうとわくわくしながら準備をすすめた。そのときの私は、せっかく日本に来るのだから、できるだけ多く日本のことを教えてあげようと思っていた。しかし後になって、これは私の思い込みだと気づいたのだ。

ホームステイ前半。肉じゃがや天ぷらなど代表的な和食を用意したが、あまり食が進まず。また日本の学校や音楽を話題にしても、話が進まず。何をしてあげてもカーラの表情が冴えない。夜九時になると部屋に戻ってしまう。そんなカーラを見て、日本が嫌いになってしまったのだろうかと不安になった。私はどうしたらいいのか頭を抱えた。

ところが四日目。カーラの提案で、オーストラリアの定番料理スコーンを作ることにした。初めてのスコーン作り、しかも英語のレシピと解説は、私にはかなりハードルが高かった。でも、お互いに「伝えたい」「知りたい」という思いが一致して、私たちは最高においしいスコーンを作ることができた。

この日を境に、私はそれまでとは逆にカーラから教えてもらおうと思うようになった。カーラは家族や学校、自然や動物など、どんな話も笑顔で、私のために分かりやすい英語で一生懸命話してくれた。私は必死だったが楽しかった。そのカーラの姿勢を見て、何かしてあげることが相手のためだという一方通行な思いが、カーラの気持ちを閉ざしていたのだと気づいた。私は相手のことを知ろうとする気持ち、そして英語に対する自信のなさから笑顔も忘れていたのだ。私は自分の思いだけで突っ走ってしまったことを反省した。お互いを理解するには、自分の思いと相手の思いの「バランス」、そして言葉の壁を越える「笑顔」が必要なのだ。

それからは無理して和食を食べず、二人が好きなチキンやスイーツを食べた。また観光地ではなくショッピングモールに行き、プリクラも撮った。私たちは日本の女子高生の普通の生活を楽しんだ。言葉や文化は違っても、女子高生が好きなものは同じだった。「特別」ではなく「普通」も大事ということも学んだ。

そして半年後の今年三月。今度は私がオーストラリアのカーラの家にホームステイ

に訪れた。「百聞は一見にしかず」という諺の通り、オーストラリアでの生活は衣食住のどれをとっても想像以上に日本と違っていた。靴のままの生活。英語しか流れないテレビ。洗剤の強烈な香り。映画やテレビでしか見たことのない生活を実際に体験した。食事は日本の食卓とは異なりシンプル。特にランチボックスの中身は衝撃的だった。カーラが私の母が作った弁当を見て戸惑っていた理由がわかった。時間の流れも違った。学校生活はゆったりしており学校が終わるのも早かった。だから放課後は好きなスポーツをしたり、家でＤＶＤを見たりゆとりがある。そして九時には自分の部屋に戻り十時には寝るという健康的な生活なのだ。カーラが九時には自分の部屋に戻っていたのは、日本の忙しい生活による疲れと、オーストラリアの生活スタイルだったのだ。私はこの初めての海外での生活を通して、日本の食文化の豊かさや、日本人の順応性の高さを知った。何でも食べたし、何でも挑戦した。でもそれはカーラの気遣いに支えられていたことは間違いない。

カーラと私のホームステイの体験から、私は「国際理解」とは何か、考えるようになった。今までの私は国際理解を一つの学問のように捉え、授業やマスメディアを通して学ぶものだと思っていた。でもそれでは単に知識として頭に入っているだけでしかない。異文化理解、そして国際理解に必要なのは、やはり共に過ごす中で生まれる一体感や相手を思いやる気持ちであると思う。さらに良い関係を築くためには、お互いの国や文化、そして考え方などの「共通点」や「相違点」を認識し、そこからお互いにとって心地のいい、「妥協点」を探す。相手の思いを汲みながら、お互いが納得できるよう試行錯誤する過程が、苦しくとも楽しいのではないだろうか。そのとき大切なのが、バランス感覚だ。自分の思いも相手の思いも、特別なことも普通のことも、知識も経験も、どれもバランスよく考えるよう心がけることだ。

この秋、再びオーストラリアを訪問する。カーラが好きなものを手土産に。もう悩まない。カーラが好きなものを知っているから。外国の人が好きなお土産ランキングのようなメディアから得た知識ではなく、経験したから知っているのだ。さらに「知っている」を増やすために、オーストラリアで新しいことに挑戦したい。この「知っている」を増やすことが国際理解に繋がると確信している。

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）
日中韓青年文化フェスティバル

高水高等学校1年 **高田　樹**（たかた　いつき）

私は、この夏にユネスコが主催した「日中韓青年文化フェスティバル」というものに参加させてもらいました。このフェスティバルは中国で開催され、中国、韓国、日本の三カ国の生徒が十二人ずつ集まり、五日間かけて人工知能についてディスカッションをしたり、中国の観光などを通して、三か国で交流しよう、というものでした。

このプログラムでは、使用言語は英語のみでした。通訳はありません。そんな中、人工知能についてのディスカッションをするのはとても難しかったです。日本語で話し合うことすら難しいのに、それをさらに英語という第二言語でのディスカッションです。想像するだけでも大変なことであるとわかると思います。でも、中国や韓国の人にとっても英語は第二言語です。与えられた条件は同じなのです。それにしても、このディスカッションは難しかったです。また、中国と韓国の人たちは英語のスキルがとても高く、驚きました。訛りはあるものの、文法はほとんど完璧でした。自信をもって話もできるし、堂々としていました。そんなハイレベルな環境で、私はたくさんのことを学びました。

まず、私は英語を鍛えられました。このプログラムでは、中国の生徒が中国の商店街や観光スポットを案内してくれる日がありました。その日は、三か国の生徒がいくつかのチームに分かれ、いろいろな話をしました。お互いの国の文化や、気候、韓国語や中国語ではどんなふうに言うのかなどといった、文化的なこと、そして、他愛のない話もたくさんしました。外国人同士とはいえ、同じ高校生であり、もっと大きく言えば同じ人間です。日本人同士でするような恋バナや、好きなバンド、歌手の話でさえもできました。そんな風に、私は人間はみんなどの国も一緒だと感じました。だから、話しかけることに恐れる必要は全くないし、自分が思ったことは素直に伝えて、伝わらなければ詳しく説明してわかってもらえばいいのだと思いました。

そんなディスカッションや日常会話の中で、私は自分の頭の中でやる英語の文章構成が早くなりました。英語を話すとき、私はまず頭の中で日本語を考え、そのあとに英語に訳しながら話すという話し方をしていました。しかし、このプログラムでは、

最初から英語で話したいことを考えていました。まるで、感覚で話しているような感じでした。何か質問したらすぐに答えが返ってきて、逆に質問されて答えるという止まることのない会話の中で、ゆっくり考えてゆっくり話していては、楽しくありません。早い会話のリズムのおかげで、私は自分の英語の文章構成のスピードを鍛えられたのです。

また、中国の観光スポットをまわることで中国の文化を知ることができました。本場の商店街や天壇など、生で見ることができ、感動しました。そのようなプログラムを通して、中国は劇のクオリティーすごく高かったり、人工知能が多く使われていたりと、日本にはまだない発展していることがたくさんあることがわかりました。

そして、もう一つ学んだことがあります。私は一度、迷子になりました、友達と学校のトイレに行ってみんなに置いて行かれてしまいました。どこに行ったらいいのかわからなかったとき、二人の中国の生徒を見つけ、事情を説明すると、先生に連絡を取ってみんながホテルに帰ったことを教えてくれました。それだけでも助かったのに、その二人の生徒は私たちをホテルまで送ってくれました。その道中は、不安な気持ちの私たちを励ましてくれたり、「安心して。」、「私たちがいるから大丈夫。」などと、翻訳アプリを使って見せ、安心させてくれました。

中国に悪いイメージを持っている人が日本は特に多いと思いますが、優しい人はたくさんいるし、みんなとても親切でした。このプログラムでできた友達を大切にし、中国は悪い国という固定概念を少しでも減らしたいと思います。

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）
もう一つの家族

高水高等学校1年 **楠野　朋子**（くすの　ともこ）

私の学校にはオーストラリアに姉妹校があります。昨年の九月、姉妹校から生徒数名が日本に来るということで受け入れをしました。私は中学二年生の夏にアメリカにホームステイしたことがあり、そのときのホストファミリーが、

「受け入れをして良かった。」

と、言っていたので受け入れる側もしてみたいと思ったからです。

バディーの子が決まったときやその子とメールをしているときは日本に来るのがとても楽しみでした。

私のバディーは一歳下のケイトリンという女の子でした。ケイトリンと初めて会ったときは背が高くてびっくりしました。そしてお互い緊張していて、あまり話すことができませんでした。でも、一緒にいるうちにすぐに打ち解けられました。ケイトリンの学校では日本語の授業があると聞いていたのですが、ケイトリンは日本語が苦手だったので家族みんなで頑張ってつたない英語で会話をしました。電車通学なので早起きをしないといけないけど大丈夫か、食事が口に合うかなど心配なことはたくさんあったけれど、私より早く起きていたし、せっかく日本に来たんだからと言って食事もいろいろと挑戦して食べていました。進んでお手伝いなどもしてくれて私も見習わないといけないなと思いました。文化祭を一緒にまわったり、野球の試合を見に行ったりどんなことでも楽しんでくれて私たちも嬉しかったです。お別れの日は家族みんな号泣でした。一週間という短い間だったけれど本当の家族のように仲良くなれました。

そして三月には受け入れをした人たちがオーストラリアに行けることになりました。先生二人、生徒十三人で行きました。ステイ先が決まるまでドキドキしていましたが、ケイトリンの家族が私の受け入れをしたいと言ってくれて、ケイトリンの家にステイすることが決まりました。そのことを聞いた時はすごく嬉しかったです。

ケイトリンの家族はお父さん、お母さん、ケイトリン、妹の四人家族で犬を二匹と

猫を二匹飼っていました。私には下の兄弟がいないし、ペットも飼っていないのですごく憧れていた環境で嬉しかったです。ケイトリンの家族はみんなフレンドリーで人見知りの私でもすぐに打ち解けられました。

オーストラリアの学校では一、二時間目の授業の後にモーニングティーといって軽食をとる時間がありました。そして三、四時間目の後に昼食。五、六時間目が終わったら下校。という流れでした。モーニングティーのおかげで授業中にお腹がなることがなかったです。

授業は日本と違ってゲーム感覚で楽しめる授業ばかりでした。映画をつくっているクラスもありました。私が一番楽しかったと感じたのはドラマの授業です。体だけで家をつくったりゾンビゲームをしたりしました。日本にもそういう授業があって欲しいです。

学校では知らない子達ばかりだったけれど

「こんにちは。」

と、日本語で話しかけてくれた子がたくさんいて仲良くなれました。学校では友達がたくさんできました。

家では犬の散歩に行ったり、料理のお手伝いをしたりしました。犬の散歩のときはケイトリンと会話が途切れませんでした。私の言っていることが伝わっていてすごく嬉しかったです。料理をするときはあまり役に立てませんでした。お父さんが元シェフでケイトリンはほぼ毎日料理をしているみたいで手際が良かったです。アボカドで薔薇の形を作っていたときは驚きました。

「Ｌｅｔ’ｓ　ｔｒｙ！」

と言われて、私もやってみたけれど上手くできませんでした。それでも、

「Ｇｏｏｄ　ｊｏｂ！」

と言ってくれました。

食べ物で驚いたことはさつまいもがオレンジ色だったこととカンガルーのお肉を食べていることです。カンガルーのお肉は少し抵抗があったけれど、食べてみると美味しかったです。何にでも挑戦してみることは大事だなと思いました。

一週間はあっという間でした。お別れのとき私が泣いていたら、

「いつでも帰っておいで。」

とお父さんが言ってくれました。

　ステイ先がケイトリンの家で良かったです。オーストラリアでもう一つの家族ができたのでいつか絶対に帰ろうと思います。

　ケイトリンとは今でも連絡を取り合っています。ケイトリンに出会えたことに感謝して、これからもずっと交流を続けていきたいです。

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）
バベルの塔

萩光塩学院高等学校2年**小川　楓花**（こがわ　ふうか）

私はこの夏、初めて外国人の友達ができた。その人の名前はジョズィー。フィリピンの女子大学生だ。

彼女と私は、私の学校が行う、ワークショップというイベントで出会った。ワークショップというのは、萩市周辺の小学生と私の学校の中学生を対象とするイベントで、外国人スタッフと共に遊んだり、工作をしたり、料理を作ったりする。今年は七月二十四日から二十七日の四日間で行われた。このイベントでは、外国人と交流するために、英語が必要である。そのため、私たち高校生に通訳などをするボランティアの募集がかかる。私はそのボランティアに去年も参加したので、今年で二回目となる。

私は英検準二級を持ってはいるのだが、Ｉ’ｍ　ｆ　ｉ　ｎ　ｅ．のような日常会話も危うい。そんな私がどうボランティアをしたのかというと、子どもたちの世話中心に働いたのだ。

イベント前日、学校の教員、高校生ボランティア、そして外国人スタッフ全員での会議があったので参加した。この会議が初対面となるので、一人一人自己紹介をした。この自己紹介でも私は、名前の次に言葉が出ずに詰まってしまい、失敗してしまった。

イベント当日。一班に外国人スタッフが一人、高校生ボランティアも何人かつき、イベントは行われた。私はノリの良い外国人と組むことができ、一日目は大成功した。しかし、その外国人から英語で褒められて、Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．としか言えなかった。

そんな日を何日か過ごし、最終日の前日の夜を迎えた。その夜はスタッフをねぎらい、バーベキューが行われた。私はこのバーベキューが苦手だ。それは去年、外国人スタッフとあまり話せず、肉も十分に食べられなかったからだ。話したといえば、黒こげになったウインナーを眺め、ａｌｒｅａｄｙ　ｄｅａｄと言った程度である。

しかし、今年は去年に比べ話すことができ、肉も大好きなナスもたくさん食べることができた。私としては大きな一歩だったが、外国人と会話するときは、他の人に訳

してもらったり、上手く伝えられなかったりしたので、不自由に感じた。

そして迎えた最終日。内容は、世界の料理を作って食べるというものだ。私は最年少の小学三年生を担当した。最年少向けということで一番簡単なフルーツサラダを作ることになった。フルーツサラダの担当外国人はジョズィーだ。

大勢で料理を作るときは意思の疎通が重要となる。さらに今回は、外国人とも話さなければならなかった。

料理作りが始まり、ジョズィーが話しかけてくるが何を言っているか分からない。自分から指示をしようとするにも、英語が思い浮かばなかった。このままでは料理ができない、と思ったとき、私は思いついた。ジェスチャーがあるではないか、と。私はジェスチャーを使い、意思疎通を図った。するとジョズィーは理解してくれ、仕事は進み、料理は無事完成。ワークショップは幕を下ろした。

しかし私は悲しかった。今年も外国人スタッフと友達になれなかったのである。そんな気持ちでスーパーで買い物をしていた。そのとき偶然ジョズィーと出会ったのである。ジョズィーは一緒に写真を撮り、連絡先も交換してくれた。初めての経験だった。

それからジョズィーとはネットで英語を使い、やりとりをしている。内容は普段私が他の友人としているものと何も変わらないもので、私は素直に驚いた。

その一週間後、夏期講習の国語の授業があり、そこで出てきた単語が印象に残った。それは「バベルの塔」という言葉だ。

バベルの塔は、旧約聖書に登場する塔で、この塔の建設で神が怒り、様々な言語が生まれ、塔は完成されなかったとされている。

私は、言語が違うだけで、塔が完成できなくなるのはおかしいと思う。それは人と人が言語でしか繋がっていなかったと言っているようなものではないか。

私は、神が建設を阻んだのは怒ったのではなく、人間に大切なことに気付かせるため与えた試練なのではないかと思った。

きっとそれは、私がジョズィーと料理を作ったとき思った、通じ合わせるべきは言語ではなく、心ということと同じなのではないか。

神からの試練を放棄し、心を通じ合わさなくなった私たちは、互いに睨み合い、今

でも助けを求める人々からは目を背けている。

　だから今こそ、バベルの塔を全人類が心を通じ合わせる象徴として完成させるべきではないのか。言語や宗教などの違いも、その前では崩れ去る、そんな塔が世界には必要なのだ。私はその試練を背負う、小さな一人として、この広い世界に訴えたいと思っている。